

研究機関名：東北大学

受付番号：	2010-374
研究課題名	胃食道逆流症（GERD）治療実態調査 －プロトンポンプ阻害薬による逆流性食道炎治療効果の後ろ向き調査－
研究期間	西暦 2010 年 11 月（倫理委員会承認後）～2011 年 3 月
対象材料	<input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input type="checkbox"/> その他（） <input checked="" type="checkbox"/> 診療録 上記材料の採取期間 西暦 2005 年 8 月～2010 年 7 月
意義、目的	<p>胃食道逆流症（GERD）の治療は、内科的治療には胃酸分泌抑制薬としてプロトンポンプ阻害薬（以下 PPI）を投与することが主流となっている。標準量の PPI を 1 日 1 回投与したにもかかわらず食道炎が治癒しない、もしくは強い症状を訴える患者に対しては PPI の倍量投与や分割投与を行うことが推奨されている。しかし、PPI の投与量、投与方法を変更した場合の有効性についてのエビデンスは十分ではない。</p> <p>PPI が日本の保険診療で使用可能となってから 20 年近く経過したが、この間に日本でも逆流性食道炎の患者数は増加や、<i>Helicobacter pylori</i> 感染率の低下に伴う胃酸分泌の増加がみられ、酸関連疾患への対応はますます重要性を増している。逆流性食道炎に対する PPI の治療効果の現状を把握することは、今後の GERD に対する薬物療法の指針を与えることにつながると考えられる。</p>
方法	<p>本研究は多施設共同、後ろ向き観察研究として実施する。</p> <p>研究担当医師は、対象となる調査期間に内視鏡検査を実施した患者のうち、PPI を 8 週間上内服し、対象基準に合致する患者を直近から連続 20 人選び、対象患者の診療記録より、PPI 投与後の内視鏡検査所見（LA 分類グレード A～D の逆流性食道炎の有無）、および副次的評価項目の各情報を収集して調査票に記入し、本研究の事務局に郵送する。</p>
問い合わせ・苦情等の窓口	東北大学病院消化器内科 小池 智幸 022-717-7171 東北大学病院心療内科 庄司 知隆 022-717-7327